

昔から他人の言葉や評価を気にせずにはいられない、そして他人を比べて評価してしまうのが人間なのかもしれません。

ほつくきょう
法句経にこのような言葉があります。

「アトゥラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしく語る者も非難される。

世に非難されない者はいない。

ただそし誹られるだけの人、また、ただ褒められるだけの人は過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。」

現代は、他人の言葉や評価を気にするあまりなのではないでしょうか、好印象を与えるための様々な方法について書かれた本や教室まであります。また一方で、面白おかしく非難するのも一つの能力とされているように思える場面があります。テレビ番組等でみられるいわゆる「ツッコミ」もその一つかもしれません。企業は、好印象を与えるためにさまざまな広報戦略を練り、クレームの対策に膨大な費用を割いています。

さて「法句経」より後世につくられた因縁話には次のように書かれています。

アトゥラという名前の信者がレーヴァタ長老の説法を聴きに行ったが、長老は瞑想をしており何も語らず、彼は何も聞けず腹を立てて、サーリプッタ長老のもとへ行ったが長老は難解な話をした。それに彼は難しいと腹を立てて、次にアーナンダ長老を訪ねた。長老はわかりやすく簡単に法を説いた。それにも彼は、今度は簡単すぎると腹を立てて、お釈迦さまのもとを訪ねそれらを訴えたといひます。それに対してお釈迦さまが答えて唱えたのが冒頭の言葉です。

レーヴァタ（離婆多）は高名なお釈迦さまの弟子ですし、サーリプッタ（舍利弗）は智慧第一、アーナンダ（阿難陀）は多聞第一といわれたお釈迦さまの十大弟子です。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

お釈迦さまのお弟子をしても、納得してもらうことができず、非難されてしまう。この世に非難されない人はいないという事。そして非難されるだけ、賞賛されるだけの人はいないという事です。

他人の評価に一喜一憂せず、また他人を殊更に非難することで心乱すこと無く心静かに暮らしてゆきたいものです。

— 終 —